

魔胎都市 Xth —Sakuya Corruption—

●目次

三章 敗北	……01
四章 底辺	……27
終幕	……58

●登場人物

円城咲耶

年若くして現役最強の誉れも高い天才退魔師。

生まれ持った類稀なる霊力を用い、幼少の頃より数え切れぬほどの妖魔を浄滅してきた。

真摯で高潔な人柄で、気品に溢れ、常に冷静沈着。

自身の力に決して驕らず、日々弛まぬ研鑽を続けている。

自他ともに厳しく接するが性根は優しく、面倒見のよさから同僚たちにも慕われている。

戦闘においては無数の呪符を使用した霊術と、神剣『アグネア』を用いた剣術、および雷の神術を使用する。

魔界調教師

謎多き淫魔の調教師。

退魔師を捉え、調教し、魔界の快楽に溺れさせ、肉欲の奴隷へと随とす事を生業としている。

その毒牙にかかった退魔師は数知れず、そのすべてが日常生活を送れないほどの肉奴隷へと随してしまっている。それゆえ、退魔師の天敵とも呼ばれている。

その唯一の例外が咲耶であり、十年前に少女時代の咲耶を囚え調教するも、随とす前に脱走されている。

淫魔の中でも特異な存在で、強大な力や高い地位を持つと思われるが、その正体は謎に包まれている。

■前回のあらすじ

淫魔に囚われた円城咲耶は魔界調教師と再会し、十年越しの偏執をぶつけられる。

十年間の時をかけて咲耶の肉体を研究しつくし、ただ快楽に随とすためだけに作り上げられた人造淫魔により、最大の弱点である乳房で壮絶な快感を刻み込まれる咲耶。さらには快楽に応じ絶頂と同時に母乳を噴き出してしまう射乳体質へと肉体改造されてしまう。

その上で数週間にも渡る徹底的な焦らし責めで、一度も絶頂させてもらえず、挿入も射乳も許されない生殺し地獄に貶められる咲耶。

それでも快楽に堕ちることを良しとせず抵抗心を持ち続ける咲耶に、魔界調教師は感服し、本来の装備である退魔霊位を与える。

その上で屈服させることで、魔界調教師は咲耶の完全な墮落を狙っていやのだ。

咲耶は欲求不満で疼き猛る肉体に翻弄されながらも、その挑戦を受けるのだった——

三章 敗北

「うっ……あ……！」

剥き出されたピンク色の亀頭が、獲物の股間へと近づいていく。

その存在感と淫気だけで、咲耶はピクン、と腰を浮かせ、期待感に甘い吐息を漏らしてしまっていた。

（うあ……す、すごい。なんて太さと長さ……あ、あんなもので……わたし、これから……！）

考えただけでも子宮がきゅんきゅんと涕泣し、それだけでもイってしまいそうになる。だが、それも無理の無い話だ。

なにせ、度重なる魔界調教で淫らに開発されてしまった肉体は、もう一週間以上も絶頂を許されていないのだから。

「はあ、はあ、はああ……あ、ああ。あ……ああ……！」

淫気まみれの肉部屋に密閉され、数え切れないほどの触手による全身愛撫と、媚薬粘液を塗り込まれながらの肉疣摩擦。それだけでも並の退魔師なら墮落してしまうほどの快楽責めを休む間もなく続けられながら、絶頂直前の絶妙なタイミングで愛撫を中断され、かと思えばまたすぐに虐められては寸止めされ、絶頂寸前の生殺しを延々と繰り返され続ける――

これまでの戦いと敗辱によりたつぷりと開発されてきた咲耶の淫乱ボディにとって、そ

それは、イカされっぱなしにされるよりもずっと辛い地獄だった。

そんなもどかしすぎるお預けプレイを、淫気と粘液にまみれた肉部屋の中でもう一週間以上も続けられて、快樂に従順すぎる咲耶の肉体は、もはやとうに限界を超えていた。

「はあー、はあ、はあ。はあ、はあ、はああ——……………！」
イキたい。

今すぐにもイキまくりたい。

この太く長くたくましい、勃起したペニスさながらの極太触手で、一週間以上も触れられていない肉穴の奥までを慰めてもらいたい。
肉壁を搔き分けて欲しい。

開発されたGスポットを擦りまくって欲しい。

子宮口にまで一気にねじり込んで貫いてほしい。

熱く濃厚な精液をドビュドビュと注ぎまくって欲しい。

お預けされっぱなしだった絶頂を、思う存分に貪りたい——

円城咲耶を最強の退魔師たらしめる鋼の精神力を持ってしても、そのような穢欲を抱かずにはいられない、陰湿極まる魔界調教師の奸謀。

だが、それでも、咲耶は——

「む、無駄です。今のわたしには……………その程度の淫魔では、触れることさえ出来ませんよ！」
キツ！ と臍を引き締め、迫る触手を睨みつけ啖呵を切る。



身体はとうに屈しきり、愛しい淫棒の挿入を待ち焦がれている。

純白の生地は愛液でべっとり濡れそぼり、飢えきった秘唇がヒクヒクと痙攣し、はやく、はやくとおねだりしてしまっている無様な様子が、生地越しでもはつきりとわかってしまうほど。

だが、それでも——咲耶は、淫魔の快楽に屈する気など微塵もなかった。

（大丈夫……大丈夫です。今のわたしには、霊衣の守護があるのです。この程度の淫魔の触手など、通じるはずがありません……!）

一度は囚われ無防備な裸体を蹴り尽くされ、それでもなお快楽に耐えきったのだ。

そして今は、淫気を遮断し霊力を鼓舞する、最強の退魔師の証でもある純白の退魔服を纏っている状態だ。

このような淫魔の責めなど、気を貼り続けていれば、どうとでも——

「ふふ、そう。今の貴方は紛うことなき最強の退魔師。ですが……だからこそ。それを快楽で墮とし、屈服させてこそ意味がある!」

「くっ! やってみなさい……出来るものならっ!」

傍らに立つ宿敵——幼少の頃に咲耶を囚え徹底的に調教し、女神のように汚れなき美体をこのように淫らな媚体へと貶めることとなった諸悪の元凶。

魔界調教師を名乗る高位魔族を睨みつけ、咲耶は叫んだ。

（そうです、無駄です! 何をされても、わたしは、決して負けません。墮ちたりしませ

「はああああ、あ、ああっ！ 入ってきますっ……霊衣ごと挿入なんて……んはあああ、あ、あ、あああああ……！」

勃起した男性器さながらの肉触手は、衣装をずらすことも破ることもせず、そのまま股布ごと肉穴奥へと亀頭をねじり込んできたのだ。

「かつ……はっ!! ど、どうして……んおお、お、おおおおお……！」

濡れそぼった秘唇を深々と貫かれ、ビクンッ！ と背筋を仰け反らせる最強の退魔師。ようやく許された肉穴挿入の快感に、飢えきった肉穴は一瞬で傾倒し、これまでお預けされていた分の絶頂が一気に押し寄せてくる。

「ひ、イ、イクツ!! 挿入られただけでイってます……んああああっ止まらないっ、こんな、こんなすごいのは久しぶりすぎて……イク、イクイクイクすぐイっちゃいます咲耶いやいますううう……！」

大きく喉を仰け反らせ、ぶるんっ！ と巨乳を踊らせながらイキ狂う。

長き戦いの中で数え切れないほどの淫魔の肉棒を受け入れ続け、ただでさえ従順すぎる開発済みの肉穴は、その上で一週間以上も淫気漬けにされながらお預けにされていたのだ。飢えに飢えきったその感度は恐ろしくなるほどで、退魔服ごとに挿入されただけであっけなく絶頂に達してしまっていた。

「は、はひっ……クひいいいいッ！ こんな、ど、どうして……おお、おほおっ！ こんな下級淫魔の肉棒など、わ、わたしに触れらるはずがないのに……イイイイ……」

ッ!？」

無防備に両足を大きく開き、自ら肉唇を差し出したV字開脚姿勢のまま、数週間ぶりの絶頂に耽溺する。白足袋に守られた足指の一本一本までをピンつと伸ばし切りながら、腔内アクメの激悦に悶絶する敗北の退魔師。わななく唇から漏れ出す疑問は、もはや、それ自体がアへ声にも等しい淫猥さだった。

「どうして？ 円城咲耶ともあろう方が、これは異な事を。貴方が自分で仰ったのですよ、こんなものでは、霊衣を身に纏った最強の退魔師に触れることさえできないと。実際、それは真実です」

魔界調教師は、そんなブザマなイキっぷりを嘲笑うことさえせず、淡々と言葉を紡いでみせた。

「は、はああつ、あ、あ、ああつ！ だったらどうして……んおおおつまだ入ってきてます、退魔服ごと奥まで……んおおおつ深い、ダメえ、そんなにさたららまたイク……ううううつ！」

「簡単なことです。貴女がそう望んだからですよ……太くて長い肉棒を入れて欲しい、子宮の奥までズボズボと犯し抜いてイカせて欲しい、と。そして貴方は、そのために霊的防御を弱め自ら肉棒を招き入れた……ただそれだけです」

「なつ、そ、そんな!! 嘘です、わたしはこんなもの望んでない、ずっと気を張り詰め……んほおおおつ激しい、奥までズボズボだめええ、イクツ、太くて長

何十何百何千と繰り返される絶頂寸止め。正気ではいられないほどのもどかしさの中、咲耶は触手相手に「イカせてください」「もうイキたいの」「許してください」「お願いしますからイカせてください」と、無様すぎる屈服おねだりを繰り返していた。

つまり——追い詰められていたとは言え、咲耶は自ら快樂と凌辱を望んでしまっていたのだ。

「そんな状態で、神聖なる霊衣の加護など望むべくもありません。円城咲耶……今の貴女は自ら喜んで淫魔に股を開き、自ら肉棒を招き入れて啜え込む……最強の退魔師などおこがましい。あさましい一匹のメスブタです」

「ひ、そ、そんなっ！ 違いますっ、わ、わたしはこのような事を望んでなど……んおおおおおっ淫魔の触手すごいいい、肉棒触手奥までズボズボ……クほおお、おっほおおおとおおおくくくく！」

（ダ、ダメです……これはダメです！ 挿入だけでもイってしまっただのに、こんなに激しく動かれたら……い、今までの寸止めされてた分の絶頂が、全部、全部来て……！）
精神では拒絶しても……いや、拒絶するフリをしても、肉体は狂うほどに待ち焦がれていたのだ。

一週間以上も触れられることさえなく、ただ一度の絶頂さえ許されなかった、飢えに飢えきった雌穴の虚ろ。

それを太くてたくましますすぎる剛直でパンパンに埋め尽くされ、奥の奥まで何度も何度も

力強く穿り返されれば、それだけで、もう——！

「イ、イクツ……イク、イクイクイク咲耶イツクうううううううううう!!」

ビクン！ と背筋をのけぞらせ、頤を突き上げて敗北のイキ声を上げる敗北の退魔師。

かつての調教で仕込まれた通り、絶頂時には自ら名を告げ、屈服した事実を報告してしま
う——そんな屈辱的なイキ癖も、久方ぶりに味わうエクスタシーをいつそう甘美に倒錯さ
せる。

「はひあああ、イ、イクツ……まだイってる……イってるの、咲耶、ずっとイケなかった
分全部イってるのお！ んはあああつすごいいい、イ、イクの気持ちいい……ひあああ、
あつひあああああ……!!」

気高い美貌をあさましく蕩けさせ、舌を突き出してアへ狂う敗北の退魔師。久方ぶりに
味わわされた絶頂の幸福感は、それまでの飢えと期待感も相まって、意識が消し飛ばすほど
に甘美。快樂に溺れきったアへ顔は、いかなる快樂責めにも耐え続けていた気高き退魔師
とは思えないほどにブザマで、淫らだった。

「楽しんで頂けているようで何よりです。ですがまだまだですよ。これまで必死の抵抗を
続けていたからこそ、敗北という名の解放のカタルシス……そのあさましい肉体の全て
で心ゆくまで貪ってください」

「ひ、あ、あ、ああつ!! いやあ、おちんちん触手また動いて……んおおおおっ激しい
い、奥までズボズボ激しいっ、退魔服ごと奥まで届いて……んほおおお、クっほおおお

おお~~~~~！

太さと長さたくましさだけでも、何百回でも達してしまふほどに気持ち良すぎるが、淫魔の肉棒によつてもたらされる快樂はそれだけでは終わらない。

期待どおりに肉壁をコスられてイカされ、子宮口までねじり込まれてイカされる。着慣れた退魔服の感触が触手のおぞましい肉感を包み込み、極上の快樂具となつて咲耶を悩乱させる。

さらにはこれまでの調教で、咲耶の肉体や性癖は、そのすべてが暴き出されてしまつてゐる。当然、膣穴の構造や弱点も、だ。

「はああ、ス、スーツごと挿入すごい、肉棒触手気持ち良すぎます……んはあああつそこダメえ、Gスポゴリゴリ……ひああああ、す、すごすぎるう~~~~~！」

ビクン！ と美体を引きつらせ、肉感的な両足を痙攣させてイキまくる。性感帯の密集した弱すぎるGスポットをあつけなく見つけ出され、集中的にゴリゴリと擦られれば、一秒だつて耐えられるわけもなかった。

「イ、イクツ！ 咲耶またイキますツ、Gスポいじめられたらすぐイカされちゃいますっ！ ひあああつこれだめええ、イ、イってるのにまだズボズボ終わらないっ、咲耶またイクのっ、イクの全然終わつてくれませんイカされっぱなしで許してもらえませんか~~~~~!!」

これまでずっと生殺しにされていた分、一度溺れてしまえばその深さは底なしだった。溜め込まれていた無数の絶頂すべてが次から次へと到来し、イつてもイつてもまるで絶頂

が終わらない。

「クはあああ、ゆ、許して……も、もうイキたくありませんっ、こ、これ以上イキっぱなしにされたらわたし、も、もう……ひ、あああああっ!!」

もどかしすぎる生殺しも地獄であったが、終わりなき連続絶頂もまた地獄だった。そのギャップがもたらす壮絶なカタルシスにイキ狂うしかない咲耶に、さらなる責めが追加される。

太さも長さも、膣穴を犯している肉棒と同格の触手がさらにもう一本。豊かに売れ育った尻割れを押し割って、後ろの穴と挿入された。

「は、はひい、んおほおおっ!! ダメです、そ、そっちは違っ……クほおおお、おっほおおおおおんッ!!」

メリッ、ズブ、ズブズブズブズブズブ!

前穴同様、何の防御力にもなっていない霊衣の布地を引き伸ばしながら、第二の肉棒触手が肛門へとねじ込まれた。

「んふっ、んお、んおおっ! お、お尻いい……だめええ、咲耶、お尻も弱いから……お尻も、ずっとイカせて欲しいって思っちゃったからああ……!」

零れそうなほどの豊臀を揺すりたくり、アナルレイプの肛悦に悶絶する淫乱退魔師。

これまでの凌辱と調教で、当然、尻穴もまた性器同様の快楽器官として開発されてしまっている。しかもこちらにも膣穴同様、これまで一週間以上も焦らされ続け、一度の挿入も

されていなかったのだ。

舌のような太触手を尻谷に咥えこまされての肉イボ摩擦で快樂だけを煽られ続け、極限まで感度の高まっていたところに、前穴同様にたくましさすぎるご褒美を挿入され、溜め込まれていた分のお預け絶頂が尻穴でも連続的に爆発する。

「イ、イクツ……イクうううっ！ お、お尻でもイってます、咲耶、お尻でも簡単にイっちゃいます……んほおおお、おお、おっほおおお……！」

ズボズボとアナルを穿り返され、溜まっていた分のアクメが連続する。子宮へ届く前穴のストロークも競うように激しさを増し、肉膜一枚隔てただけの前後の穴で怒涛の連続エクスタシーが共鳴して止まらない。

「クあ、ひああ、あっひあああ!! ダ、ダメ……またイクツ、前もイクツ、後ろもイクツ！ はああああっお預けされた分全部キてるうう、こんな、こんな……クほおっおお、クっひいいいいい……!!」

ビクンッ！ と背筋をのけぞらせ、舌を突き出して悶絶する淫乱退魔師。お預けにされていた数千もの絶頂が、前でも後ろでも連続して止まらない。

（うああ……ダ、ダメです……これ、これえ！ ずっとイケなかった分、全部キてます……イ、イってもイっても終わりません、ずっとイキっぱなし……お、おかしくなってます……うううう！）

これまで許されなかった絶頂を、遠慮なく貪りまくる——お預けからの解放がもたらす

カタルシスの快感は、もはや破滅的だった。

「お、お、おとおおっ！ ま、まだイってる……ツクはあああっ前も後ろもイクの終わらないっ。今までイケなつたぶんずつと、咲耶、ずつとイキっぱなしになつちやてるのおおおう~~~~!!」

「そうですか、楽しんでもらえて光栄ですよ。ですがお忘れではないでしょうね？ わたしの魔界調教が貴方の肉体に刻み込んだ、あの快樂の証を」

「は、はひ、イイイツ！ はひあああ、あ、あ、ああああ………!!」
ぬる、にちゆ、ぐちゆううう………!

媚薬粘液を大量に滴らせた触手が、新たに伸び出した。

どこもかしこも魅力的すぎる、熟れに熟れた女神の女体の中でも、特に目を引く蠱惑の美点——悶絶するたびぶるんぶるんと激しく揺れ踊り、溢れんばかりの肉感をこれでもかと見せつけている美巨乳へ、それぞれ触手がとぐるを巻く。

「う、あつ！ ダ、ダメですつ、胸は許して……さ、咲耶おっぱい弱いから、おっぱい、えつちに改造されちやつてるから……ああああつ！」

根元から先端に向けて、ぎゅうううう、と強く搾り上げられる。それだけでも軽く達してしまい、咲耶は大きく上半身を仰け反らせて悶絶した。

（あ、あああ……ダメです、これだけはダメえ！ わ、わたしのおっぱい……ずつとイキたがってましたから。気持ち良すぎるミルク、いっぱい溜まっちゃってますから……あああ

!!

(うあああ、す、すごい……いいいっ！ おっぱい出しながらイクの……やっぱり、すご
く……気持ち良すぎます……！)

数週間も続いたお預けで一時的には忘れていた射乳の快感だったが、一度射乳してしま
えば、その乳悦に支配されるまでは一瞬だった。

たつぷりと溜め込まれた母乳を吐き出す爽快感、霊力を失ってしまう虚脱感。濃厚なミ
ルクに乳線を擦られるこそばゆさ、射乳前にミルク乳が乳首を昇ってくる期待感、そして
それを一気に吐き出す開放感――

「うあああ、す、すごい……すごい、すごいいいいっ！ お、おっぱい出すの……射乳
絶頂すごすぎますっ、やっぱりい……お、おっぱい搾られてドビュドビュ射乳するの、気
持ち良すぎますおかしくなっちゃいますううう……!!」

たわわな巨乳をぶるんぶると揺すりたくり、大量のミルクを迸らせ続ける淫乱退魔師。
最強の退魔師の桁外れの霊力が変換された母乳は、その量も底なしだ。つまりそれは、こ
の射乳の快感が、いつまでも終わらないことを意味している。

(うあああ、まだ出てる……：咲耶のミルクいっぱい出てるううう！ ダメですっ、こ、こ
んな……おっぱいイクのとまりませんっ、咲耶のミルク、生殺しのせいでいっぱい溜まり
すぎてるから……イってもイっても終わりません、射乳アクメ終わらないのおお……
!!)

これまでの調教で、たっぷりと教え込まれた射乳の快感。数週間もお預けにされていた分、蓄えられてた母乳の量は凄まじく、噴水のように母乳を吹き続けても、射乳の勢いはまるで衰えない。

「んはああ、出る、出る出る出るまた出るまだ出るううううっ！ ひあああっこれダメです、しゃ、射乳気持ち良すぎっ……ひいいいんっまだミルク残ってるうう、搾らないでっ、そんなにされたら咲耶おっぱいまたいつちやうから……許してえ、またミルク出しながらいつちやいますからああああ……！！」

ビクン、ビクンビクンビクンッ！ 折れそうなほどに仰け反らされた女体が、絶頂のたびに激しく痙攣する。

一週間以上も熟成されてきた濃厚な母乳は糸を引いて霊衣を濡らし、イキっぱなしの三穴からは粘っこい蜜潮が飛沫つづける。

「クはあああ、イ、イクッ、またイクううううっ！ んはあああっおっぱいもあそこもイってる、イキ終わってないのに次のアクメキちやうっ！ お、お尻もズボズボだめえ、ひあああ、クリシコシコしながらズボズボだめだめそれだめえええ……！！」

濡れた生地をビンビンに浮かび上がらせてしまっているクリトリスにも、淫魔の触手が襲いかかった。

双穴ピストンとタイミングを合わせ、小刻みな振動でクリトリスをシコシコと刺激され、あるいはギュツとつまみ上げられてシゴかれる。

さらには噴乳中でイキっぱなしの乳首にも触手が巻き付けられ、シコシコとシゴきたてられ快楽を煽られた。

「ひぐうう、グ、クひいいいいっ！ ゆ、許して、それダメですっ、おっぱいでもあそこでもお尻でもイってるのにクリいじめるのダメっ、乳首も一緒にシコシコだめええっ！ そ、そんなのされたらまたイク、咲耶、全部一緒にイクイクイクイクまくっちゃいますうううううう！！」

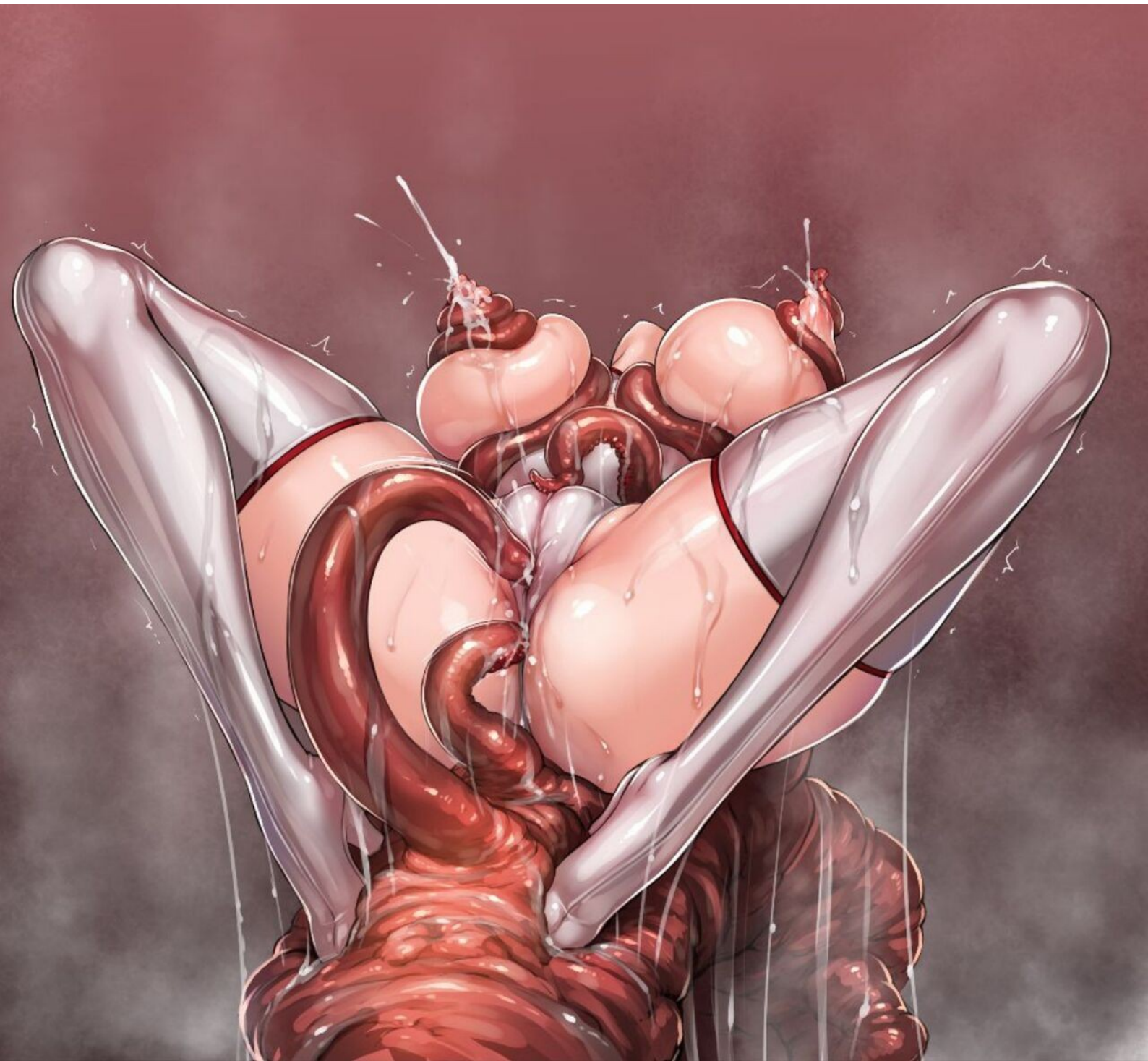
弱すぎる肉豆を三箇所同時にイジられながら、肉膜一枚隔てただけの前後の穴を互い違いにピストンされ、狂いそうなほどの快楽が止まらない。悶えるたびにブルンブルンと揺れまくる巨乳も左右同時に搾り潰され、母乳を噴き出しながら絶頂させられる。

「イ、イクツ、咲耶またイきますッ、またイカされちゃいますっ！ んはああああっイクの全然終わりませんっ、イ、イキ終わってないのにすぐ次のキちゃう、イキっぱなしなの、咲耶、気持ち良すぎてイキっぱなしが終わらないのおおおお！！」

霊衣を纏おうが、まったくの無意味だった。

むしろ完全武装状態でさえも快楽に抗えなかったという事実には惨めな敗北感を煽られ、いつそう敗辱のマゾヒズムに倒錯してしまう。

「はあああつ退魔服ごとズボズボすごいいいっ、か、勝てませんっ、咲耶、こんな下級な触手にも勝てませんん！ んはあああつまたイカされちゃうっ、咲耶、下級淫魔のちんぽ触手でズボズボされて両方一緒にイクイクイクイクいっちゃいますうううううう！！」



「認めましたね。そうです、貴方はもう下級淫魔にさえ勝てない最下級の肉便器なのです。これからは絶頂を報告する際には自らの名やイクという宣言だけでなく、その事実を言葉にして反芻しなさい。雑魚淫魔にも勝てません、快楽に負けてしまいます、としつかり敗北宣言するのです」

「ひ、い、いや……いやあぁっ！　そ、そんな惨めなのイヤですっ、絶頂だけでなく敗北まで宣言するなんて……ひあああぁっまた負けちゃいますっ、咲耶イキますっ、おっぱいでもおまんこでもお尻でも負けちゃいますっ、咲耶、こんな最下級淫魔の雑魚触手にも全然勝てないの負けてイカされっぱなしになっちゃってますぅくくくっ！」

拒絶できたのはほんの数秒だけ。魔界調教師の命令に従い、惨めすぎる敗北宣言を告げながらイキ狂う敗辱の退魔師。

本来なら触れることさえ許さないはずの下級淫魔に手も足も出せず、あらゆる場所で徹底的にイカされまくる——『淫魔の快楽に屈服することⅡ退魔師としての敗北』と最初から認識しているからこそ、それは咲耶にとってあまりにも屈辱的で、だからこそマゾヒスティックな倒錯悦を引き起こすものだった。

「はあああ、負けるっ、負けますっ、また屈服しちゃいますぅうっ！　ぜ、全然勝てないのっ、咲耶弱すぎるのっ、雑魚触手にイカされっぱなしで……はあああぁっまた負けちゃうっ、咲耶勝てないの負けちゃうの負けっぱなしでイキっぱなしになっちゃうのおおおくくくく!!」

紫銀の髪を振り乱し、頤を仰け反らせて悶え狂う。霊衣をまとった最強の姿でありながら、下級淫魔の触手になすすべなく犯され、カクカクと腰を痙攣させて使ってイキ狂う——快樂に媚びきったアへ顔は、かつての凜麗な退魔師と同一人物とは思えないほどのズザマさだった。

「よろしい。完全に快樂の虜に堕ちましたね。では最強の退魔師が負け癖の付いたメスブタになった記念に、素晴らしい贈り物を差し上げましょう」

「は、は、はひああああ……ひ、あ、あああっ!!」

ドクン、ドクン、ドクン……!

イキっぱなしの肉穴を穿り続けるピストン触手が、それぞれ激しく律動を開始する。

それが何を意味するのか——数え切れないほどの敗北凌辱を味わい続けてきた退魔師には、わかりきっていた。

「ひ、ダ、ダメ……ダメですっ! い、今射精はダメっ、い、今もイってるのに、イキっぱなしの………咲耶、今中出しされちゃったら………あ、あああ………!」

(ま、負ける……絶対負けちゃう、完全に堕ちちゃう! もう戻ってこれなくなる………こ、これ以上は、もう、もう………!)

恐怖。絶望。そして、それ以上の期待感——

キyunキyunと子宮が軋み、考えただけでも何度もイってしまおう。無意識のうちにへこへこと迎え腰を使いながら、敗北の退魔師はその決定的な瞬間を貪ろうとした。

「墮ちなさい円城咲耶。今日から貴方は最強の退魔師などではない……他の退魔師同様、わたしに躓けられた、ただの無価値なメスブタの一匹に墮ちるのです」

「そ、そんなっ……ひあああつ許してください、これ以上墮ちたくなんてありませんっ、わたしは、咲耶は……ひああああ、あ、あああああ——!!」

無関心に呟かれた魔界調教師の言葉に、いやいやと首を振り、涙を流して許しを乞う。

それが一体何を望んでのことか、咲耶自身もわからないまま——待ち望んでいた破壊の瞬間は、訪れた。

「あ、あ、ああっ！ あっ、あああああ——!!」

ドビュツ！ ドビュツ！ ドビュドビュドビュドビュツ！

ドブツシャアアアアアアアアア——！！

「ひ、あ、あ、あああつ！ で、出てるっ……淫魔の精液っ、濃いっの、熱いの、すごいのおおっ！ 前にも後ろにも、いっぱい、いっぱいいいいっくっ!!」

引き伸ばされた霊衣を貫通し、大量の粘濁が前にも後ろにもぶちまけられる。

もはやコンドームほどの役にも立たない退魔服は、淫魔の精液を僅かにも防いではくられず、濃厚極まるザーメンが容赦なく肉穴奥へと注がれまくる。

「クほおお、おお、おほおおおおおおッ！ んおおおお、おっほおおおおおっおっくっ!!」

一週間以上も続く生殺しの寸止め調教では、当然、中出し射精などしてもらえないはずも

ミルクによって、最強の退魔師のシンボルである純白の靈衣は淫らな白濁に染まっっていく。
「んはああ、はあ、はあ、はああ……はツクひいいいい！ うあああつまたイクツ、
まだイってる……んほおおつまだ止まらないいい、射精も搾乳もイクのも止まらないっ、
咲耶勝てないのっ、雑魚淫魔に全然勝てなくて、快楽に負けっぱなしで……イク、イク
イクイクイクイククううう……!!」

従順に快楽を貪り、自らの名を呼びながら、自ら敗北を宣言してイキまくる。

魔界調教師に仕込まれた調教の成果をこれでもかと見せつけながら、かつては最強の退魔師と呼ばれた女は、淫らなメスブタにまで堕ちた姿を晒してした。

（あああつ、ま、負ける……負けちゃう、堕ちちゃう！ このまま……さ、咲耶……快楽に負けて……お、堕とされてします……ううう……!!）

中出し絶頂でいっている最中に、乳首とクリトリスをシゴかれてまたイカされた。

イってしまえばおっぱいも屈して射精してしまい、そうしたらまた子宮でもイって、乳首をシゴかれてイカされて射精し、クリトリスをシゴかれながらの両穴射精でまたしてもイカされる――

「イ、イクツ……イク、イクイクイクイククうううううううう！ はあああつダメです、お、堕ちちやいます……咲耶、こんなの気持ち良すぎて、もう、もう……ツクっひあああああああ……!!」

汗と涙と愛液と母乳、穴という穴から体液という体液を噴き出しながら、イってイって

イキまくる。

耐えることを諦め、敗北を認めて墮落することによってこそ、初めて味わうことの出来る破滅的なエクスタシーに、咲耶は正体をなくし狂乱した。

「円城咲耶。これで退魔師としての貴方は終わりです。ここからは、淫らな肉奴隷として完成させるだけです」

「ひ、ひあああ……あ、あああ。いやあつ、わ。わたしは……わたしはそんなにはなりません、咲耶まだ負けないっ、肉奴隷なんかにならな……んはあああつまた中出しイクツ、快楽に勝てないっ、ミルク搾られてイクイクイクイクイっちやううううううう!!」

常にイキっぱなしで負けっぱなし。もはやまともな理性も、思考力さえも残されていない。

それでも咄嗟に墮落を拒絶する咲耶だったが、その気高さすらも自らの屈服の声で否定してしまふ。

(あ、あ、あああ。ダメです……わたし、もう、このまま…………!!)

「イ、イクツ……またイキます、咲耶イっちゃいますううううっ! はあああつ負けちゃうっ、イクの気持ち良すぎてもう、もう……咲耶、イキすぎ負けすぎで墮ちちやいますううううううう!!」

快楽に抗うことを止め、敗北を認め、快楽を貪りまくり狂乱する。

気高き最強の退魔師など、ここにはいない。

円城咲耶は、こうして——最強の退魔師ではなく、敗辱の牝奴隷へと堕ちてしまうのだ
——
つた

四章 底辺

それから――

咲耶に待っていたのは、文字通り地獄のような日々――
否。

ある意味では、極楽にも等しい日々だった。

「はあああ、あ、あ、ああっ！ うあああ、ま、また……クはあああ……あ、あああっ！」
完全敗北した咲耶に対する調教は、苛烈を極めた。

濃厚な淫気に包まれた肉部屋に密閉され、そこに巢食う様々な淫魔により、一秒たりとも休ま事を許されず犯され続ける事数ヶ月。

屈服しきった乳房や子宮だけでなく、ありとあらゆる部分を徹底的に改造され、鋭敏すぎる快楽器官として開発し尽くされることとなった。

「だ、ダメですっ……触手でコスるの……はああ、あ、あああっ！ 霊位越しにゴシゴシ……イボイボ食い込んで……くひあああ、あ、あああっ！」

触手に四肢を拘束され、腕を引っ張られ前屈させられた屈辱的な敗北ポーズ。無防備に突き上げられた豊満ヒップには舌のように野太い触手が押し当てられ、股間や乳房にも同様の肉橋が食い込まされている。そのまま全身をブラッシングされるようにゴシゴシと磨かれるのは、あのとときの生殺し肉部屋で刻まれた、咲耶の恥ずかしすぎる性癖の一つだ。

「はあああ、コ、コスらないで……ひあ、ひ、クひいいいっ！ こ、これ弱いんですっ、

咲耶、イボイボ触手にコスられるの弱いっ……ひあああ、あ、あああっ！」

絶頂する前から、もう自分の名前を口にして媚びてしまっている——そこまで堕ちてしまっていることにも気づかず、大好きな摩擦責めに感じ入る。霊衣を着せられたまま調教されているのは、当然、完全な状態でも下級妖魔にさえかなわないという身の程を教え込むための趣向だ。

「クはああ、コ、コスるの強いっ……しつこいつ、しつこすぎますううっ！ はあああっこんなにされたらまたイっちやいます、イク、イクイクイク咲耶また雑魚触手に負けてイカされちやいますうううう！！」

『敗北』を自覚するように仕込まれた『負けてしまう』という絶頂宣言。惨めすぎる調教の証をしつかりと晒しながら、かつての最強の退魔師は、言葉通り雑魚触手にさえ敗北してしまう。

しかし触手摩擦はまったく止まることはなく、退魔服に守られていない背中にも太い肉舌が押し当てられた。絶頂直後で小刻みに痙攣する背中から項までを、ねっとり媚薬粘液を塗りつけながら、長大なストロークで舐め上げられて愛撫される。

「ひっ、そ、そこっ……ふあ、あ、ああっ！ だめですっ、い、今はいったばかりなのに……おっぱいでもお尻でもあそこでもイキ終わってないのに、こ、こんなにコスっちゃ……ひあああ、あああああっ！」

ぬるっ、ぬちや、ずる、べちよっ！

ローションじみた大量の粘液をたっぷり塗りつけられながら、背筋の窪みを抉るようなしつこさで何度も何度も愛撫される。背中を刺激される搔痒感とともに、脊髄にまで響くような快美感が、ゾクゾクと駆け巡って止まらない。

「ひ、や、いや……あああっ!! な、なんですかこれっ、せ、背中ゴシゴシされるのすごい……わ、わたし、背中なんかで感じているなんて……こんな場所が、気持ちいいなんて……え！」

自分でも知らなかった性感帯を、またしても暴き出されてしまった。

もう、下級妖魔たちに、自分の弱点を全部知られ、それを一箇所一箇所丹念に教え込まれてしまっている——

そんな敗北感と絶望感が、マゾヒスティックな悦楽をいっそう快美に倒錯させる。「ひいい、い、いやっ……いやです、こんなのいやあぁっ！ 教えないでくださいっ、こんな、咲耶も知らなかった弱点雑魚妖魔に教えられちゃってるっ、いやです、背中でイクのなんて覚えてなくなっ……ふあああ、あっああああ……！」

今日もまた、肉体の一部を淫らな性器へと貶められた——どうしようもない敗北感と屈辱、そしてそれ以上のエクスタシーに、咲耶は背中を大きく仰け反らせて絶頂する。

「イ、イクッ！ 背中でイっちゃいますうう、咲耶、背中也弱いのおお、下級淫魔にまたえっちな快感教え込まされちゃって……勝てませんっ、また負けます、雑魚触手なんかに背中犯されてイカされちゃいますうう……!!」

聞くも哀れな無様すぎる敗北宣言を告げながら、あさましくイキ狂う屈服の退魔師。こうして教え込まれた新たな性癖はその美しい肢体に刻み込まれ、最強の退魔師の美肉は、雑魚触手にすら勝てない淫乱痴肉へと貶められていく。

「はあ、はあ、はあ、はあ……あ、あああつ!! やっ……そ、そこは……あ、ああ………!!」

咲耶への肉体改造は、わずかな休息すらなく延々と続く。自らが零した愛蜜でしとどに塗れそぼり、大陰唇の膨らみどころか肉割れの形状さえ浮かび上がらせてしまっている股布へ、微細な肉イボをビッシリと生え揃わせたブラシ触手が押し当てられた。

「ひっ、だ、だめ……そこは……あ、あ、ああ………!!」

その卑猥すぎる形状と感触だけでも軽く達してしまった咲耶は、触手の狙いを察し、怯えた声を零してしまふ。

衣装越しに肉割れへ食い込まされて摩擦されるだけではない。イボイボブラシの狙う先は、同じく塗れた生地にくっつきりと浮き出した小さく可憐な雌の肉豆——女性の性感帯のなかでももつとも鋭敏な、快楽神経の塊であるクリトリスだった。

「うあああ、ダ、ダメです……はあああつ! そ、そこっ……お豆はダメですつ、ク、クリトリス敏感すぎるからつ、そ、そこいじめられちゃったら……勝てないからつ、絶対また負けちゃうから……あああつ!」

シユシユシユツ……ゴシ、ゴシゴシゴシゴシゴシツ!



「はあああ、ち、乳首っ……はああああンッ！ ダメですっ、咲耶乳首も弱いのも、乳首もこんなに大きくなって……触手シコシコだめ、おっぱいぎゅうぎゅうしながら乳首クチュクチュだめだめだめ許してえええ……！」

かつての凜声とはまるで違う、媚びきった甘声で泣き悶える墮落の退魔師。

母乳体質に改造され最大の弱点とされた乳房だけでなく、その先端で屹立する乳首も、今ではさらに淫らに変貌してしまっていた。

乳首も乳輪も二周り以上も肥大化し、常に発情しきった勃起状態。感度に関してもクリトリスに匹敵するほどで、乳首はおろか、乳輪をつつっ、となぞられるだけでも達してしまう。射乳のたび内側から乳線を開発され、外部からは触手による徹底的なシゴキ責めで躡けられて、もはや咲耶の乳先端は、外側も内側も怖いぐらい快樂に従順に躡けられてしまっているのだ。

「うあああ、イ、イクッ……咲耶イキますっ、乳首でイキますっ！ はあああっ咲耶のお豆弱すぎるのお、乳首もクリも……はああっ許してええ、全部一緒に触手シコシコなんて……だめええ、こんなのズルいです勝てるはずありませんまた負けちゃいます乳首もクリも全部負けてイっちゃいますううう……!!」

三箇所同時の敗北を宣言しながら、長髪を振り乱して悶絶する淫乱退魔師。淫猥に躡けられ、肥大化しきった三つの肉豆は、咲耶にとって敗北のシンボルそのものだ。常に包皮を剥き、あるいは母乳をにじませた勃起したまま外見はあまりにも下品で、己がもはや最

強の退魔師などではなく、調教済みの肉奴隷であるのだと否応なく実感させられる。射乳
体質に改造されてしまった巨乳果同様、ここまで改造されてしまった肉突起の治療は、も
はや不可逆だろう。かつて最強と呼ばれた退魔師は、今後の人生において、常にこの淫ら
な肉体を引きずることになるのだ。

(うああ、そ、そんな……ああっ。わたしの身体……クひいいい、ンンッ！　こんな……
いやらしく改造されてしまうなんてっ……！)

屈辱と絶望にもはや抗うすべもなく、咲耶はその美貌を曇らせる他に道はない。最底辺
の牝豚にまで貶められてしまった退魔師には、もはや、この境遇を脱するすべはないのだ。

言語能力さえない、女を犯すことしか考えられない下級な淫魔相手にも、今の咲耶は、
手も足も出ないのだから。

「ふあああ、あ、あ、ああっ！　ダメです、おっぱい、そんなに絞っては……クはあああ
あっ！　うあああ、乳首同士こすり合わせるのもだめっ、おっぱいと乳首、両方一緒にい
じめるの気持ち良すぎます卑怯ですこんなの絶対勝てませんんんん……ッ！」

数ヶ月にも渡る調教において、最大の弱点でもあり、また最も蠱惑的な美点でもある巨
乳への責めが行われなかった日は、一日たりともなかった。

溢れんばかりの量感と、蕩けそうなほどの柔らかさ。堕ちてなおつんと凜々しく張り詰
めながら、その実、触手の一撫でだけでメロメロになってしまう淫乱すぎる肉果実。咲耶
自身でもまったく抑えることの出来ない乳悦は、何度味わわされてもまったく慣れること

なく、また日々新たな快楽を教え込まされてはそれを余すところなく貪ってしまうのだ。

「はあああ、だ、だめっ、これだめええ！ やああっおっぱい揉みながら乳首擦り合わせるのダメです、こ、こんなの教えないでください、咲耶のおっぱい、こんな気持ちいいの覚えちゃったらまた弱くなっちゃうから……咲耶、おっぱいでまた負けちゃいますからああ……！」

絶頂に至らずとも、相手が最下級の妖魔であっても、もはや憚る事なく媚びてしまう——もうとつくにクセになってしまっている、自らの名を呼び、自ら敗北を宣言するという調教の成果を見せつけながら、新たな乳悦に耽溺する淫乱退魔師。悶えるたびにぶるんぶると揺れまくる乳房を中央に寄せるように揉み潰されながら、下品に勃起しきった左右の乳首を押し付けあわせれコリコリと擦り合わされる——イボイボまみれの触手にシゴかれるのはまるで違う、自らの乳首の硬さとカタチのいやらしさを知らしめられながらの乳凌虐。眼前で見せつけられる勃起乳首の摩擦ダンスの淫猥さに、咲耶は目を離せなかった。

（うああ、あ、ああ。わたしの乳首……あ、あんなに勃起して……いやらしい、カタチも、硬さも、感触も……全部、全部いやらしすぎます……うう……！！）

肉奴隷として墮とされながら、なおも残された高潔さが、逆に自らを責める枷となる。墮ち果てた自らの有様にプライドを削られながら、それが一段とマゾヒスティックな敗辱感を加速させる。

「い、いや……いや、いやあ……あ、あああつ！ も、もう許してください、咲耶のいやらしい乳首もういじめないで……ふあああつおっぱいもすごいいいっ、いやらしいのっ、ムニユムニユ撓んでいやらしすぎるのっ、こんなあ、咲耶のおっぱい、こんな、こんな……あつあああああ……！」

むにゅむにゅむにゅ、ぎゅうぎゅうぎゅうつ！

乳峰にとぐろを巻いた触手にきつく搾り上げられながら、中央に寄せるようにしてグラインドされる。触手搾乳の力強さと心地よさ、おっぱいを引っ張られて引きちぎられそうなほどに伸ばされる痛みと被虐感、乳首同士をコリコリと擦り合わされるピンポイントな快感も忘れない。

様々な乳悦が混在した複雑な悦楽は、数え切れないほどの絶頂を教え込まれた弱点であっても決して慣れることを許されず、咲耶の巨乳は、またしても屈辱の敗北絶頂を極めさせれることとなる。

「ひ、イ、イクツ……イクううううつ！ 咲耶またイっちゃうの、咲耶おっぱい弱すぎてすぐ負けちゃうっ……はあああつおっぱいイったらまた出ちゃう、気持ち良すぎるミルク……ふああああ、クっはあああああ……！！」

ドビュツ！ ドビュツドビュツドビュツドビュツドビュツ！！

絶頂した両乳房から、敗北の証である絶頂ミルクが猛烈な勢いで噴出した。コリコリと押し付け合わされる乳首が飛沫を上げて、向かい合う乳首と乳房へと、自ら母乳をぶっか

けてしまう。

「ひいひいッ……ン、ンッ！ 咲耶のおっぱい、自分のみるくかかって……はあああ
っすごいひい、ドロドロして、濃くって、甘くって……あ、あんっ！ 咲耶のミルクえっ
ちな、咲耶のおっぱい、い、いやらしすぎるの……おお……！！」

眼前で展開されるぶっかけ射乳絶頂の凄艶さに、咲耶は舌を突き出して耽溺した。ビュ
クビュクと繰り返される律動が密着した乳首同士を震わせて、乳線を攪られる感触と相ま
つてたまらないほど心地よい。

溢れる母乳は左右の乳孔で交換され、逆側の乳線へと逆流した。ドロドロした母乳が乳
首から乳線へ、そして乳奥へと流れ込んでいくのは、もはや自らの母乳による乳線中出し
レイプと呼んでも過言ではない

「ひ、ひあああ……あ、ああっ！ お、おっぱいすごいっ、ヌルヌルで、どろどろで、熱
くて濃くって……ええっ！ こんなにされたらまたイっちゃう、咲耶、自分のミルク自分
で乳首に注ぎながら、またおっぱいでイっちゃいますううう！！」

ぶしゃ、ぶしゃ、ぶしゃあああああああっ！

自らの母乳を注がれた乳房が再び絶頂し、新たに湧き上がった母乳が滝挿入された乳汁
を押し出しながら噴出する。自身の母乳によるセルフレイプという異常すぎる快感に喉を
仰げ反らせて悶絶する咲耶だったが、貪婪極まる媚巨乳が貪る快感はそれだけでは終わら
ない。

勢いよく射乳を続ける左右の乳房を揉み潰されてまたイカされながら、射乳中の乳首同士をまたしても激しく擦り合わされれば、新鮮な搾りたてのミルクによってまたしても自身の乳首を犯されてしまうのだ。

「ひああ、あ、あ、クひあああああつ！ いやああ、そ、それダメですつ、咲耶のミルクいやあああ、自分の母乳で犯されるのいやあああつ！ こ、これ許してえ、こんなのされたらまたイっちゃいますから、いったらまた母乳噴き出して……また犯されちゃうつ、咲耶、自分で自分のおっぱい犯しながらイキまくっちゃいますうううくくくく!!」

乳房を触手に搾られて射乳を強制され、乳首摩擦でイカされながら自らの母乳を注がれてまた達し、そうすればまたしても絶頂射乳を極めて自らの乳首へ中出し射乳を極めてしまふ——それは終わることなき乳絶頂の無限機関。異常極まるセルフ母乳ファックの絶頂ループに、咲耶はぶるんぶるんと巨乳を振りたくって、時を忘れてイキまくった。

「はあああ、はあ、はあ、はあ、はあああつ！ うああああ……あ、あ、ああああ………
……！」

すっかり従順に躡けられた乳房と肉豆だが、他の部位への調教も劣らず苛烈で淫猥だった。

触手で四肢を束縛され身動きできない状態で、やはり休む間もなく乳房を愛撫されながら、咲耶は今度は、口穴までもを第三の性器として開発されていた。

「ん、んむううう……ん、んぐつ！ んむうう……ふ、ん、んん………！」

粘液を飲み干すしかない。

「んぐ、ごぶっ、ごくっ、ごくっごくっごくっ……んんっ！　んはああ、こ、これいやあ……んぶ、ごくっ！　こ、これえ……味も、匂いも、感触も……んぷあああっすごい、ドロドロ濃くって……甘い……んちゅ、んぶ……んんっ！」

触手から放たれる粘濁は、ひどく濃厚で粘っこかった。嚥下しようとしてもべつとりと喉にへばりつき、何時間も残り続けてひどい味と匂いを残留させる。それでも次々と注がれる粘濁に窒息しないように喉を動かすも、ドロリ、ドロリと流しこまれるその感触は、まるで、スライムに喉を犯されているようだった。

（はああ……す、すごい……いい。淫魔の精液……濃くって、ねばねばで、プリップリで……ああ。喉にべつとりへばりついて……吠耶の喉、お、犯されてるみたいですよ……！）

子宮や肛門に中出しされるのとはまた違う、屈辱感と被辱感、そして女としての幸福感。味覚という点においては他の二穴を凌駕する口壺は、最初こそ嫌悪と拒絶を示していたものの、その雄臭い味と濃厚な性匂、そして粘りつくドロドロ感に、今ではもうメロメロになってしまっていた。

「はあああ……ん、んむっ……ごく、ちゅむ、んむ……ん、んんっ！　んぷあああ、ま、まだ出て……んはあああっ動いてます、口の中どびゅどびゅしながらズボズボっ、こ、これ……だめです……ううっ……！」

数リットルもの粘濁をたっぷりと時間をかけて注ぎながら、ペニス触手は硬さと太さを

保ったまま、激しいピストンを繰り返す。飲みきれず口内に溜まった粘液と自分の唾液とをグツチュ、グツチュとかき混ぜられ、媚薬作用で性器さながらに敏感になった喉奥までもをズボズボと穿り返されれば、脳にまで響く口悦に思考までもが溶けてしまう。

「ふむううっ、んむ、ぐふ、んんっ！　んぐちゅっ、ふ、ふむ……ん、んんっ！　す、すご……んぐう、ごく、ぢゅぶっ……んむ、んぐ……んぶうううう！」

清楚な美貌を悩ましげに歪め、呼吸困難で顔を苦しげに紅潮させながら、しかし快楽に媚びた声を漏らしてしまふ囚われの退魔師。本来なら口を噤んで挿入に抵抗するか、あるいは歯を立てて抵抗を示す退魔師だが、今は美貌を汗ばませ、自ら唇を窄めて凌辱者を歓迎してしまう有様だ。

「はああ、あ、あむっ……んむ、ちゅぶっ！　んぷああああ、ふ、太い……あむ、れろ、んむっ。太くて、長くて……ペろ、れろ。はああ……す、すごい……です……ううう…………！」

嫌悪でも拒絶でもなく、媚びた嬌声を零しながら、口辱の快感に耽溺する。いつしか咲耶はさらなる快楽をねだるように、自ら舌をうごめかし、口内で暴れまわる触手に自ら絡めてしまっていた。

「はむうっ、ん、んむっ……ちゅぶ、ん、んんっ！　んぷあああ……れろ、あむ……んむ、ちゅう。んぷああ……は、はむ……れろ……んん、んんっ！」

いじらしい舌奉仕に、肉棒触手も嬉しそうに反応した。粘液まみれの触手を器用に蠢か

せ、咲耶の舌を絡め取ると、シコシコとシゴきたてて可愛がる。かと思えば思いつき引つ張られて吸引され、あるいは歯茎までも舐め磨いて愛撫された。たっぷりと媚薬粘液を舌に塗り込められ、味蕾の一つ一つまでを濃厚な雄味に塗りつぶされて、精液の味と匂いが思考にまで染み付いてしまう。

「ふむあああ、ひ、ひぐっ……んむ、んじゅうううっ！ やああ、す、すごい……う、上手いのお。こんな……あむ、んじゅ、んむっ！ す、すごひ……んむ、んじゅむううううっ！」

肉舌触手による変幻自在のディープキスに、ただ翻弄されるがままの敗北退魔師。うっとりと目を細め、ヨダレを零しながら相手に身を委ねきつたその評定は、まるで恋人とのキスに悦ぶ生娘さながらだ。

「んはああ、す、すごっ……れる、んむ、じゅぶ、んんっ！ き、気持ちいい……はあ、れる、んむ、んちゅっ。下級妖魔のキスッ……はああっ上手すぎますうっ、咲耶っ、雑魚妖魔のキスでメロメロになっちゃっています……んむ、んじゅるるる……んんっ！」

言語能力すらない下級な触手、それも口を犯すだけの一本相手に、まるで恋人のように口を許し、舌まで絡めてキス快感に浸ってしまったている——最強の退魔師として許されるべくもない背德的な情事は、それがゆえにマゾヒスティックな倒錯感を引き起こし、堕ちた退魔師を身も心も蕩かせていく。

「ん。ふあああ、はあ、れる……あむ、ちゅむ、れる……んむ、ちゅ……んんっ！ んは

ああつもうだめです、べ、ベロシコシコすごいつ、奥までジュボジュボたくましすぎてつ……か、勝てませんつ、咲耶、雑魚触手のキスに負けちゃいますつ、キスだけでイカされちゃいます……ううう!!」

情熱的な、あるいは屈辱的なキスを交わしながら、口だけで達してしまう淫乱退魔師。瞬間、それを察した触手も大きく脈動し、一際濃厚な精液をたっぷりと口内にぶちまけた。

「んぶつ、ごぶ、ごく、ごく、ごくつ! はあああつすごいいい、お、犯されてるつ、咲耶のお口、ドビュドビュズボズボ全部犯されて……ふぶあああつ、あむ、ぢゅぶ、んむ……ん、んぶうううつ!」

消化器官を快楽器官へと貶められ、淫靡な悦びに溺れてしまう——どうしようもない背徳感が、それ以上に甘美な快感へと倒錯する。マゾヒスティックな墮落の悦びにゾクゾクと身悶えながら、咲耶は妖魔相手のキスという名のセックスに耽溺する。

そして、最強の退魔師が見せた墮落へのサインを、淫魔たちは決して見逃さない。口内責めのペニス翼手同様、大量の媚薬粘液を滴らせた複数の触手が、ビクビクと痙攣を続ける咲耶の肢体に絡みついた。

「はああ、あ、あむ、んむ……ふ、あ、ああつ!! ら、らめつ……今イってるのに、キスでイカされてるところなのに……そんな、そ、そつちまでいじめられたら……クふううううううんんッ!」

逃げたくても、首まで固定された完全束縛では身動きされ許されない。そんな状態で追



加されたのが、これまでの調教で暴き出された気持ち良すぎる犯され方——ビッシリと肉イボの生え揃ったブラシ触手に股布越しに秘唇をコスられ、太く力強い触手に両乳房を搾られながら乳首をシゴかれる——どれも、咲耶の大好きなやり方だ。

「ふあああ、だ、だめっ……それだめ、それだけはだめですううっ！　咲耶それ好きだからっ……おっぱいぎゅうぎゅうしながら乳首シコシコっ、肉イボ触手でおまんこゴシゴシッ……ふああああっ許してええ、お、お口まだイキっぱなしなのに、こんな、こんな……ああああっ！」

口という新たな性器での悦びを教え込まれながら、すでにクセになっている乳房と秘唇での辱悦も反芻させられる。開発済みの淫らな肉体はもうとつくにクセになってしまっている馴染みの肉悦にすぐさま屈服し、あっけなく絶頂してしまう。

「イクッ……イキますっ、咲耶イキますっ！　はああああっおっぱいでイクのやっぱり気持ちいいっ、イキっぱなしのオマンコゴシゴシされるのもいいですっ、咲耶これ好きい、気持ち良すぎてクセになっちゃってるの勝てないのまたすぐイっちゃのおおおおっくく！！」

胸で、乳首で、秘唇で、陰核で。それぞれ呆気なく達し、たまらない快美感が押し寄せ。その絶頂感に引きづられ、先程イったばかりの口穴も、またしても快樂の彼方へと押し上げられる。

「んはああ、ま、またっ……んぷああああっお口も一緒にイっちゃう、だめえ、雑魚触手

相手のキスイキクセになっちゃう、…咲耶、お口でも簡単にイカされるようになってっちゃう！ こ、こんなの覚えたくないのに……んぷあああ、んツクひいいいいいいい〜
〜！」

すでに堕ちきった肉体に引き摺られ、口も唇も同じ最底辺の快樂具にまで堕ちてしまう。その後も延々と股間を擦られながら一緒にイカされ、あるいは前後の穴を貫かれながら喉奥までを同期して抉りぬかれ、忘れられない快感を刻まれていく。射乳と同時に数カ月ぶりに触手を引き抜かれ、飲みきれなかった精液を吐き出しながら迎えたゲロ吐き絶頂の開放感は、もう、一生忘れられないだろう。

「んぷあああ、げぼ、げぼげぼげぼげぼげぼ！ んはあああついつてるうう、お、おっぱいドビュドビュ気持ちイイツ、いやああ、ミルクと一緒に精液ゲロ吐いてイっちゃうなんて……んはあああつ、げぼつ、イクツイクイクイク咲耶全部出しながらイっちゃううううう〜！！」

愛蜜と母乳と吐瀉物とに全身をまみれなさせながら、あさましすぎるエクスタシーに悶絶する敗北の退魔師。自らの分泌物で純白の靈衣をドロドロに汚し、触手の粘液で余すところなく美肌をヌメラせたその姿は、退魔師という概念に対する冒瀆ですらあった。

(うあああ、あ、あああ。こ、こんな……。わたし……もう、もう……！！)
堕ちた——堕ちきってしまった。

もはや咲耶の身体の中で、淫魔に犯されていないところなど一つもなく、性器化されて

いない部分などどこにもない。

執拗にして苛烈なる調教に屈服した最強の退魔師は、もはや、身も心も完全に肉便器へと墮してしまっていた。

「あ、あ……あああつ。ふああああ、あ、あああ………！」

だが、墮ちようが壊れようが、淫魔たちは咲耶を食ることをやめようとしなない。

たとえ人間以下のメスブタへと墮ちたとしても、円城咲耶の美肉は最強の退魔師のそれ。別格の霊力は妖魔にとって最高の滋養であり、そしてそれ以上に、その熟れきった肉体はこれ以上ない好餌なのだ。

「ひっ……ん、んっ！」

ずる、ずる、ずるるるるっ………！

四肢を拘束していた触手が、そのまま咲耶を真下へと引っ張り込む。内臓じみた肉床がグズグズと蠢くと、まるで口を開くように変形する。おぞましい肉口へとブーツの爪先が飲み込まれ、白手袋に包まれた指先も取り込まれていく。

「やつ……あ、あああつ!! な、何を……咲耶、これ以上何をされてしまうのですか……あ
あつ！」

『何をする』かを注意するのになかう『何をされるか』を期待してしまっている——屈服した退魔師の思考は、自ら意識せずとも、もう、そこまで墮ちてしまっているのだ。

そしてその期待感に違わず、肉部屋全体が鳴動し、咲耶の四肢をズブズブと奥深くまで

飲み込んでいく。

「うあ、あ、ああつ！ 腕も、足も……ふあああ、た、食べれられて……ひいいんっ！ わたし、ま、丸呑みにされるのですか……ふああああつ！」

ぞぶり、ぐちゅ、ずぶぐちゅずぶうううう！

両手両足を飲み込んだ肉穴が、まるで口のように咀嚼運動を開始する。触手による引き込みと肉床の吸引運動により、加速度的に肉床に飲み込まれていく肉贅の退魔師。両足は太もも半ばまでもを飲み込まれ、むっちりとした肉感を味わうようにムニユムニユと押しつぶされて犯された。両腕は肘までを飲み込まれ、指先の一本一本までをしゃぶられる。咲耶は肉床に寝そべるような四つん這いの姿勢で固められたまま、四肢を丸呑みにされて貪られているのだ。

「ふっ……く、ふ、ああつ！ うあああ、た、食べられてます……腕も、足も、ぐちゅぐちゅって食べられて……ひいい、んんんっ！」

ブーツ越しに、あるいは手袋越しに感じる、肉穴による咀嚼運動。地下にたっぷりと溜まっていた大量の媚薬粘液を塗りつけられながら、呑まれた部位全体を締め上げられながらマッサージされる——今の咲耶にとっては、それだけでも耐え難いほどの快樂責めだ。

しかし肉床密着の四つん這い呑み込みがもたらす快感は、それだけでは終わらない。両肘まで呑まれ肉床へと身体を押し付けられた密着姿勢では、たわわに実りきった美巨乳もまた、同様に接地してしまっているのだ。肉床に押し付けられた巨乳はむにゅりっ、と柔

媚に撓み、肉イボまみれの地面と擦れるだけでも「ああっ」と呻いてしまうほどに感じてしまう。たまらず逃げようとしても、拘束触手によって乳峰を搾り上げられながら、ぐいぐいと前方に押し付けられていっそう食い込まされてしまう。

「ひ、や、あああああっ！　だ、だめですっ、お、おっぱいグニユググニユツ……ふあああああっコスれちやううう、許してっ、咲耶おっぱい敏感すぎるからあ、こんなに激しくコスられたらまた負けちやうから……ふあああ、あ、あああああっくくくく！」

弱すぎる乳房への密着愛撫に、ビクン！　と背筋を仰け反らせ悶絶する。弓なりに反らされた背中へも肉舌触手が押し当てられ、背筋にそってズリズリと擦られながら肉床めがけて押し付けられた。

「ひっ、ん、んんんっ！　やめっ、せ、背中あ……背中也ダメですっ、咲耶、背中も開発されちやってるからあ、せ、背中もすぐ弱いつて教えられちやったから……ふあああっヌルヌルゴシゴシ許して下さい、こんな、こんな……あああくくくく！」

この数ヶ月で新たに暴かれた弱点での快感を思い起こされ、すぐにその悦びに溺れてしまう。ビクビクと背筋を痙攣させながら身悶えれば、その分乳首が肉床とコスれあい、耐え難い乳悦に追い詰められた。かといってそれから逃れようと背中を浮かせれば、自分から肉舌へと背筋を押し付けて快樂を貪ってしまう――

「ひあああ、だ、だめえ……こんな、こんな……ああっ！　お、おっぱいすごい、せ、背中も気持ちいいっ……咲耶弱いっ、おっぱいも背中も弱すぎるのに……こんなあ、両

になつてしまつてゐる咲耶のおっぱいは、止まることなく母乳を吹きつけて溺れてしまふ。
「はあああ、あ！ あ！ あつはああああ……ああつ！ の、のまれてるうう……咲耶のおっぱい、ぜ、全部食べられて、飲まれて……ひあああつすごいいい、咲耶、こんな、こんなのっ……おとおお……！」

両手両足を丸呑みされただけでなく、おっぱいまでもを食べられ、乳肉も母乳も両方一緒に貪り尽くされる——肉便器どころか餌にまで落とされた最強の退魔師は、そんな惨めすぎる境遇に、被虐的な倒錯悦を禁じえなかつた。

射乳絶頂のたび潮を吹き続ける秘唇や、ぶるんぶるんと左右に振りたくられるヒップへも、肉イボまみれの触手が殺到する。そしてそのどれもが、これまでの調教で暴き出された、咲耶の大好きなやり方でそれぞれの弱点を責め始めた。

「ひ、ひああ、あ、あああつ!! お、お尻……ふあああつだめええ、ゴシゴシするの、イボイボ食い込まれながらコスられるのっ、それ、弱い……いいいいっ！」

豊満な尻たぶを左右にこじ開けられ、尻割れに野太い触手を食い込まれながら、前後に動かされて摩擦される。会陰部を肉イボで刺激され、よじれてハイレグ状に食い込んだ股布を肛門内までめり込まされながら摩擦される。ゴシゴシとコスられる快感が、背中での愛撫とも共鳴して狂おしいほどに心地よい——アナルレイプよりも気持ちよくて恥ずかしい摩擦刺激の性癖に、巨臀を振りたくり感じ入る淫乱退魔師。

引つ張られた股布がきつく食い込み、肉割れの陰影や勃起したクリトリスの形まで浮き

蹴られる場所すべてで屈服し、イってイってイキまくる。

あさましく蕩けきったアへ顔にも、粘液まみれの触手がべちよおつ、と擦り付けられ、そのままスリスリと愛撫された。

「ひぶっあ、あひっ……や、あああっ！ か、顔は……顔はいやですっ。お顔は許し……んひあああつ、ひやふ、んむ、んぶああ……ああっ！」

粘っこい精液をたっぷりと塗りつけられて白化粧を施され、紫銀の長髪にも触手粘液を塗り付けられて汚される。濃厚に香る精液の匂いと味が脳裏に満ち、髪の毛の一本一本までもが粘液ブラッシングでゾクゾクと感じてしまう。

「ひああ、い、いや……いやあ……あ、ああっ！ か、髪まで犯されてるっ……こんな、こんなので感じちゃうなんて……ふあああ、い、いや……いやああ……あああっ！」

女の命でもある顔と髪までもを、性玩具として扱われる——ここまで堕ちきった牝豚であつても本能的に忌避される、人としての尊厳さえもを蹴られる汚辱行為。触手による顔面レイプから逃れたたくても、四肢は完全にホールドされ、おっぱいまでもを丸呑みされて搾られ続けている状況では、わずかに身じろぐ事さえ許されない。

「はああ、い、いやっ……んむ、えむ、うぶううっ！ んはあああっ甘いい、触手のヌルヌル美味しくって……はああっお顔ヌルヌルにされるの気持ちいいのっ、咲耶、こ、こんなのも負けちゃう……顔と髪犯されて、咲耶、こんなのでまたイっっちゃう……うううううっ！」

女の命を犯されながら、信じられない場所ですらまで屈服させられる。

肉という肉、穴という穴はもちろん、顔や髪までもで性器同然に屈服してしまおう——もはや咲耶とい人間の肉体は、その全てが淫魔の性玩具へと貶められてしまっていた。

(あ、あ、あああつ。わ、わたし……もう、もう………!!)

霊衣を纏ったままなのに、こんな下級淫魔にもまるで抵抗できない。

おっぱいを潰されれば呆気なくミルクを搾り取られ、絶頂と同時に射乳したミルクを飲まれてさらなる快感を叩きつけられる。

お尻をコスられたり、背中を撫でられたりといった変態的な愛撫に耽溺し、自ら肢体をくねらせて愛撫をねだる。蕩けきった膣穴を穿られれば呆気なく達し、聞くも淫らな屈服宣言を叫びながら連続絶頂。晒した無様なアへ顔までもを性器扱いされ、肉棒触手を押し付けられて何度も何度もイカされまくる——

「はあああ、イ、イクツ……負けるうう、勝てないいいっ！ さ、咲耶もう墮ちちやつてるのお、雑魚触手に弱いところ全部知られちゃって、全部暴き出されて……はあああつまた負けちゃううう、イクツ、咲耶、イクイクイクイクイキっぱなしになっちゃううううううううう!!」

あらゆる場所を無数の触手に犯されまくり、あらゆる場所でイカされまくる。

肉という肉、穴という穴どころか、髪の毛一本、細胞一片に至るまで、すべてが淫魔の肉贅として最適化されてしまった——美しき退魔師の形をした墮肉の塊へと、妖魔たちは



吐き捨てるように大量の欲望をぶちまける。

「ひ、あつ、あつあつあつ！ あひああああ……あつあああああ——！！」

ドビュツ！ ドビュツ、ドビュドビュドビュドビュ！

ドブツシヤアアアアアアアアアア——ツ！！

「クはあああつ！ あ、熱いいい、濃いいい、しゅごひいいいっ！！ 雑魚妖魔の精液つ、いっぱい、いっぱい出されてっ……はあああつまたイクツ、咲耶、雑魚妖魔に中出しされてイクぶっかけされてもイクイクイクイク完全敗北してイクの止められないのイカされっぱなしなの負けっぱなしの雑魚なおおおうくくくく！！」

背中にかけて絶頂し、尻割れにぶっかけられて絶頂し、肛門へも流れ込んだ精液でまた絶頂。子宮への中出しでは当然のように何十回も連続絶頂し、蕩けきったアへ顔を白濁に染め上げられてまた絶頂——自らも大量の母乳を噴き出しながら、咲耶は全身を白濁にまみれさせてイキまくった。

「あはあああつ……あ、あ、あああつ。クはああああ……あ、ああ……あああ………
……！！」

もう、思考する余裕さえも残されない。

うわ言のようにイキ声をあげ続ける退魔師を、さらに大量の触手が包み込み、大きく開いた肉床が、その全身を丸呑みしていく。

(あ、あ、あああ。わたし……もう、こ、このまま………！！)

堕ちていく——どこまでも、どこまでも、奈落の底の底辺までも。

かつて最強の退魔師と謳われた女は、もはや快樂に溺れきった、最底辺の肉贄にまで堕とされてしまったのだ——

幕終

「ふあああ、イ、イクツ！ 咲耶またイキますっ、触手に全然勝てなくて……ふああああつまた負けちゃいますっ、下級妖魔の触手に何度も何度もイカされちゃいますううううう」

自分でも惨めだと思いつつも、止めることの出来ない、敗北の嬌声。

その日もわたしは淫魔に犯され、為す術もなく快楽に溺れてしまいました。

「う、あ、あああ……。こ、こんな……。ふあああ、あ、あああっ！」

本来なら相手にもならない、取るに足らない下級な淫魔です。

本来ならわたしを躡るところか、肌に触れることさえ叶わないでしょう。

けれど今は、もう……

「は、はああんっ……。あ、あ、あああっ！ だめです、ま、また……。んはあああ……。ンンッ！」

わたしは、こんな下等な淫魔にさえ、なされるがまま……

魔界調教師によって開発し尽くされた肉体は、淫魔の凌辱にまったく抵抗できず、呆気なく快楽に屈服させられてしまうのです。

いえ……。負け癖がついてしまっているのは、肉体だけではありません。

「あ、あああ……。すごい……。き、気持ちいい……。下級淫魔の触手に犯されてイカされるの……。あはあああっ、咲耶、好き……。イイイツ……。！」

もはや抵抗しようという気概さえ蕩かされて……

肉体だけでなく精神までが、もう……………

(っ…………い、いえ。まだです…………わたしは。まだ……………！)

忌まわしい肉悦を嬉々として貪りながらも、わたしは、まだ抵抗を諦めていませんでした。

肉体は、とうに堕ちきっています。

悔しいし恥ずかしいけれど、それは認めざるを得ません。

魔界調教で開発し尽くされ、淫らな肉体改造を隅々まで施され…………わたしの肉体は、もう、とつくに快樂の虜へと堕してしまっているのです。

けれど……………

(ま、まだ…………まだです。耐えなければ…………今は耐えて、なんとか、脱出の機会を……………！)

そうです。

状況は、十年前に初めて捕縛されたときと同じです。

あのときも、今と同じ…………いえ、今以上に絶望的な状況でした。

未成熟な肉体を散々に弄ばれ、未知の快樂をたっぷりと教え込まれ、身も心も性奴隷へと堕とされかけました。

けれどわたしは耐えた…………耐えて耐えて、なんとか脱出を果たしたのです。

今よりもずっと未熟で弱かった幼少のみぎりでも、わたしは、淫魔に一矢報いてみせたのです。

そして十年の月日を経て……今のわたしは、あの時よりもずっと成長してします。

あの屈辱を撥条に、二度と淫魔に屈してなるものかと……あのような思いを二度としな
い、そして誰にもさせてはならないと、わたしは決意も新たに研鑽を続けてきたのです。

そのわたしが、こんな……こんな事で墮ちるなど……ありえません!!

「クはあああつ! あ、あ、あああつ! またイクツ、咲耶またイカされちゃう……触手
オチンポずぼずぼすぎすぎてまた負けちゃうつ、咲耶つ、もう淫魔の肉奴隷になっちゃう
うううう!!」

次の日も、また次の日も、そのまた次の日も。

もう日付の概念も不明瞭……朝と夜の違いもわからないほどに休みなく、わたしは犯さ
れ続け、調教し続けられました。

そのたびわたしは、様々な淫魔に屈服させられました。

子宮でも肛門でも、口でも顔でも乳房でも、背中でも太もももお尻でも、乳首でもク
リトリスでも……ありとあらゆる場所で敗北の悦楽を教え込まれました。

けれど……そんなもの、今更です。

「はひあああつ! ゆ、許して……もうおかしくなっちゃいます、こ、こんなに犯され続
けたら咲耶壊れちゃうつ、イク、イクイクイクイクすぎておかしくなっちゃいます狂っ

やいますうううううう!!」

どれだけイカされても。

どれだけ屈服させられても。

どれだけブザマを晒しても。

わたしは、絶対に……………!!

「……………ッ!」

そして……………肉体だけでなく精神までもがもう限界、というギリギリの状況で。

その機会は、ついに訪れました。

「……………」

その日。

一体いかなる趣向であるのか……………わたしは肉牢から連れ出され、屋外で触手型の淫魔とまぐわらされることになりました。

もう何ヶ月が経過しているのかもわかりませんが、久方ぶりの人界の外気はすごく心地よくて……………肉部屋の淀んだ淫気と湿気に慣れてしまっていたわたしは、目が覚める思いでした。

もちろん周囲には街の灯りなど見えず、人間の生活圏からは遠く離れた場所なのでしようが……………それでも、この清浄な空気は、失われた活気を蘇らせてくれるものでした。

(この状況……………ならば……………!)

現在地はわからなくても、ここが人界であるのは確かです。そしてわたしが堕ちきって戦う力もないと侮っているのか、周囲に強力な妖魔の気配は感じられず、監視役もいません。

(どこまでも侮って……けれど、今はその油断に感謝します。これは好機です!)
後はここから脱出し、人里を目指すだけです。

そのための障害は――

「グチュ、グチュチュ……ニチュグチュ……」

わたしとまぐわせるために用意された、肉塊状の淫魔。無数の触手を備え、周囲にまで肉塊状の身体を伸ばしたその巨体は、外面こそおぞましいものの、感じる妖力は大したことはありません。

(下級な淫魔ですね。相変わらず、わたしを馬鹿にして……!)

魔界調教師が用意する妖魔は、大小の差こそあれ、すべてがこの類の下等種でした。

女を犯し快楽を与える能力のみに特化し、戦闘力は皆無に等しい最下級妖魔……普通の戦闘なら、絶対に遅れをとったりはしない相手ばかり。

「っ……………」

そんな相手に負け続け、雑魚相手に屈服させられるのは、まさに屈辱の極み――それが魔界調教師の狙いだったのでしよう。

こんな最下級の魔物にさえ逆らえず、性的に屈服させられてしまう存在だという認識と

敗北感を、わたしに植え付けるために。

「っ……はあ、はあ、はあ………」

今もそうです。

目の前の肉塊から放たれる淫気に身体は疼き、乳首は勃起し子宮は切なく疼いてしまいます。

男性器じみたたくまじすぎる触手や、蠕動を繰り返すおぞましい肉イボの塊を見るだけで、胸が高鳴って、甘い吐息が漏れてしまいます。

わたしは……こんな下級妖魔に嬲られることを、今も期待して………

（っ……ち、違います！）

わたしは軽く髪を振り、そんな懦弱な想いを振り払いました。

そうです。

これは千載一遇のチャンス——外界に出され、こんな雑魚一匹をあてがわれただけのこの状況は、またとない好機なのです！

（この淫魔を倒し、この場から脱出します。問題ありません……容易な事です！）

「すううう……はあああ………！」

わたしは深く意識を集中し、霊力を練り上げます。

確かにこれまでの調教で疲弊しきり、また霊力も母乳として搾り出されて収奪され、今のわたしは万全の状態とはいえませんが。

けれど、わたしは円城咲耶……自ら名乗ったことはありませんが、最強の退魔師と呼ばれてきた自負はあります。

(このような淫魔に、もう遅れは取りません。あの日からずっと……わたしは、そのために力を研鑽し続けてきたのですから……！)

そうです。

このような下級な妖魔を倒す程度、今のわたしでもまるで問題はありません！

「グチュルルル……ヂュル、ヂュルルル……！！」

そうとも知らず、下級淫魔は不用意にわたしに近づき、触手を伸ばしてきました。

「っ……………」

戦いのイロハも知らぬ、あまりに不用心な接近。その上、触手の動きはひどく緩慢で、見切るなど造作ありません。

太さも長さもすごくて、イボイボイボまみれのカタチはすごく気持ちよさそうだけど……こんないやらしいだけの触手、戦いでは何の役にも立ちません。

簡単に身を躲して、無防備を晒している巨体に、必殺の一撃を——
ぬる、ぐちゅ、ぐちゅうううう……………！！

「えっ？」

気づいたときには、足が動くことをしてくれませんでした。

腐肉状に広がった淫魔の肉体に両足を飲み込まれ、機動力を殺されてしまっていたので

す。

「っ！ い、いつの間に……………？」

気づかなかった？

この、わたしが……………こんな下級淫魔の手管に……………？

「ッ！ で、ですが……………この程度の拘束など、簡単に……………！」

そうです、焦る必要はありません。

相手は戦闘力など皆無に等しい雑魚妖魔なのです。この程度の拘束、すぐに解いて――

「っ!! ど、どうして……………足が抜けません。身体に、力が入りません……………！」

なぜ!!

捕まえられた足が、まるで動きません。

こんな下級淫魔の力に抵抗できない……………い、いえ。

まるで、抵抗したくないと……………このまま捕まっていたい、そっちのほうに気持ちよく慣れるのだから……………とでも言うように……………

「ッ!! そんな、違います！ わ、わたしは……………うあ、ああああ!!」

ニユル、ニユルルルッ!

伸びてきた触手に、今度は腕まで拘束されてしまいます。

こんなもの、霊力を発揮すればすぐにでも引きちぎれる……………はずが……………

「はあああ……ん、んはああああつ！」

ヌルヌルとした不気味な感触。肌に食い込むイボイボの凹凸。ドロドロと染み込まれる粘液のおぞましさに。ビクビクと蠕動を繰り返す雄々しいたくましさ——それらが腕から伝わっただけで、わたしは甘い声をあげ身悶えてしまいました。

（そんな……ど、どうして?! こんな触手などに……て、抵抗……できないなんて………!）

妖力も腕力も、まるで大したことはありません。

訓練中の若手退魔師でも、さして手こずることはないような妖魔でしょう。

それぐらい低レベルな相手……どれだけ疲弊しているとしても、このわたしが後れを取るはずが……

「ふあ……ん、んあああつ！ はあああ、だ、だめ……えっ！」

予想外なのは、それだけではありません。

わたしは、自分でも信じられない、媚びたような猫撫で声を上げていました。

「っ！ な、なにを……くはあああつ！ こ、こんな拘束……はあ、はあ、はあああつ！ 触手っ、ヌルヌル擦れて……はあああ、気持ち……いい……っ！」

拘束を解こうとすると、その分触手と四肢とが擦れあい、おぞましい感触がいつそう伝わります。

それが気持ちよくて……わたしはグチャグチャと粘音を立てながら、四肢を緩やかに蠢



かせ、自ら触手に擦り付けてしまっていました。

「はああ、く、くふああ、んんっ！ ふあああ、あ、あ、あああ……んんんっ！」

外見上は、触手の拘束を振りほどこうと手足をもがかせている……けれど、その実は……

「はああ、はあ、はあ、はああっ！ 触手う、グチャグチャして……はあああっ。コ、コスれてますっ……ふあああ、あ、あああ……！」

ぐちゃぐちゃ、ニチャニチャとした感覚が癖になって、自分から腕や足を擦り付けて、楽しんでしまっているのです。

（そ、そんな!! わたしの身体……ど、どうして……）

これでは、まるで……

簡単に逃げられるはずなのに、相手にもならないはずのに……

自ら下等な淫魔に身体を預け、凌辱をねだってしまっているかのようにではないですか……

「そんな……ち、違いますッ！ わたしはそんなこと望んでいません、わたしは、こんな雑魚妖魔になど……んおおおおおっ!!」

ぬる……ずる、ぬるるる……!!

その反応をもって、わたしを非力な獲物——いえ、淫気に欲情しきって快樂へと身を捧げた、淫らなメスと判断したのでしよう。

触手淫魔は肉棒状の触手を無遠慮に広げ、すでにじつとりと濡れて発情臭を漂わせている、わたしの秘唇へと伸ばしてきました。

「っ！　そ、そんな……やめなさい、そ、そこは許しませんよ！」

そんなことを言うぐらいなら、実際に攻撃してしまえばいいのに……こんな雑魚、簡単に倒してしまえるはずなのに。

わたしには、それができませんでした。

「うあ……そ、そこ……はう、くううっ！　ふあああ……ん、んんんんっ！」
ぬる、にちゅ、にちゅ……ずるずるずる……！

太く長く逞しい肉舌状の触手が、わたしの両足の間に潜り込み、力強い前後運動を開始します。

「ふあ、あ、ああっ！　ダメ、動かないで……そ、そこコスったら……ふあああ、あ、あひひいいいっ！」

股布越しに、ゴシゴシと肉舌を力強く擦り付けられます。

霊衣に守られたわたしに、こんな雑魚淫魔の攻撃などで、ダメージなど僅かにもありません。

けれど、肉体的なダメージはなくても……！！

「はあああ、す、すご……クふああ、あ、ああっ！　肉イボ摩擦気持ちいいっ……ふああ

ああ、あ、ああああっ！」

快楽は、そうではありません。

退魔服の防御でも、わたしの霊力でも、まるで防げない……いいえ。

わたしは自分から腰を振り、疼く秘唇を肉丸太にコスリつけて、自ら快楽を貪ってさえるのです。

「はあああ、こ、コスれるの気持ちいい……ふあ、はうあああつ！ ね、粘液ヌルヌルも気持ちいいのお……ああああっ感じます、太くて逞しい触手っ、き、気持ちいいの……おおおおお……！」

戦闘力では相手にもならない雑魚淫魔。

けれどわたしは、そんな相手に、文字通り手も足も出ないのです。

いえ、それどころか……自ら腰を振って、快楽をねだってしまったているのです。

「うあああ、こ、こんな……はああ、あ、あああつ！ だめです、な、流されては……はうううっ太くて硬いっ、雑魚触手なのにつ、どうしてこんなに逞しいのですか……はああ、ひ、卑怯……こんな気持ちいいのズルいです……くふううんっ！」

こんな触手、一瞬で倒せるはずなのに……わたしは戦うことをせず、自ら快楽をおねだりしします。

へこへこと前後に腰を踊らせるだけではありません。触手を掴み抵抗していた指は、その太さとカタチを愛おしむように卑猥に指を蠢かし、触手拘束された両足は、もじもじと太ももを擦り合わせてしまっていました。

(い、いや……ああ。こんな……こんな。わたし……こんな雑魚淫魔にも抵抗できないのですか……快樂に勝てないのですか。ああ……な、なんと惨めな……！)

かつては最強の退魔師と呼ばれていた自負とプライドが、心の中で軋みをあげます。

惨めな敗北感は背徳感へと繋がり、いつそうマゾヒスティックな悦びを引き起こしてしまします。

「はああ、だ。だめです……はう、くうううつ！　こ、ここで流されてはダメ……耐えないと、耐えきれないと……クはああああっ!!」

ぬる、ずちゅ、ぬるっずちゅっぬるずちゅずちゅ！

辛うじて振り起した克己心——のようなもの——を、触手淫魔は容赦なく押し潰してきました。

両足の上に食い込まされた肉舌が、これまでの緩慢さが嘘のように、猛烈な勢いでグラインドを開始したのです。

「ひ、ひああ、あああっ!!　こんなっ……い、いきなり激し……ツクはあああ、はっひい
いいいいんっ！」

大量の媚薬粘液を塗り込められながら、触手全体をグラインドさせての猛烈な摩擦運動。前後だけではなく上下にも肉舌を激しく動かされ、肉イボをグイグイと秘唇に食い込まされて扱われます。

「ひ、うああ、あ、あっああああ!!　ダメですつ、そ、そんなに動かされたら……そんな

にコスったら……あはああンっ！」

疼く股間に太すぎる肉舌をグイグイと食い込まされ、微細な肉イボを無数に抉り込まされて、それだけでも気持ち良すぎるのに前後左右へのランダムな激動でコスられまくり、凄まじい快感が止まりません。

「クはあああっ許してくださいっ、く、食い込みもコスるのも激しくって……そんなにされたらわたし、も、もう……もう…………！」

意識が、持っていけません。

流されてはダメ、そうわかっているのに……

身体が屈してしまっ、もう、抑えきれない——！

「イ、イクッ！ 咲耶イキますっ……どうとでもなるはずの雑魚触手に負けてイカされちゃいます、イク、イクイクイクイクイクッくうううくくくく！」

ぶしゃ、ぶしゃ、ぶしゃあああああああっ！

肉舌摩擦で蕩けきった肉唇が決壊し、大量の愛液が潮を吹きます。

ガクガクと両足が痙攣して力が抜けて、身体を支えられず……そのまま、股間の肉舌へと身体を預けてしまいます。

「はあああっ……あ、あああっ！ く、食い込む……ふあああっダメです、いった後は敏感なのに……ま、まだイキ終わってもイないのに……いい…………！」

肉椅子に体重を預けてしまったせいで、より深くまで食い込んでしまいます。

屈服絶頂の幸福感を思い出してしまった肉体は、すっかり快樂に従順になり、さらなる快感を求めて腰振りを加速します。

肉舌触手もそんないやらしい腰使いを味わうように、さらに激しさを増した律動で、絶頂中の股間を容赦なく磨き上げてきます。

「ふあああ、だ。だめえ……許して、今は許してください！ い、今いったばかりなのに……はあああつ気持ちいいの思い出しちゃう、だめえ、こ、これだめ……えええ……！」
ズリ、ズリ、ズリズリズリッ！

激しく前後に摩擦され、敏感すぎる肉唇を容赦なく可愛がられます。

体重を預けきって深々と食い込んだ肉舌を、そのままズイ、ズイツと前後に動かされれば、先程以上の快感が、先程よりも敏感な急所で響き渡ってー

「ひあああ、イ、イクツ！ さ、さつきいったばかりなのにまたイクツ、咲耶、もう触手に勝てないのまた簡単にイカされちゃうのおおお……！」

『耐えてみせる』

『脱出しなければ』

『今が好機』

『こんな雑魚妖魔、どうとでもなる』

そんなおこがましい考えは……もう、少しも残されていませんでした。

「ふあああ、イク、またイクツ！ はあああつ全然勝てません、また負けちゃいますつ、
咲耶またイカされちゃいますツ！ はああああつ触手摩擦気持ちいいいつ、ダメなお、
咲耶、また、また……快樂に負けてイっちゃいますうううくくく!!」

あどけなく媚びた声で、自らの名を叫びながら、絶頂するたび何度も何度も敗北を宣言する――

魔界調教師に躡けられた通りの痴態をこれでもかと晒しながら、わたしはイってイってイキまくります。

（うああああつ……き、気持ちいい。触手に負けるの……下級妖魔にメチャクチャにイカされるの……すごつ、気持ち良すぎます……ううう……!!）

肉体だけでなく、精神までが堕ちて……

もう、わたしの思考には、気持ちいい事しかありませんでした。

そしてそんなわたしに、魔界調教師の施した調教の傷跡が、さらに容赦なく追い打ちをかけてきます。

「あ、あ、ああつ!! うあああ、こ、これつ……ひ、ひあああ……ああああ……!!」
お腹が熱い――

イカされっぱなしの子宮が、燃えるように熱くって、蕩けるように甘くって……
「うああ、こ、これつ……うあああつダメです、い、今は……今、こんな……あつあああ

ああああ！」

自分自身の肉体です。

わかります。

わたしの身体の奥芯で、まさに今、あの忌まわしい刻淫が発動しているのです。

「うああっ……ど、どうして……あ、あああっ……!!」

見上げれば叢雲。そして、朧に霞む月の姿。

紅く染まったそれは、まるで、悪夢のようでした。

「あ、あ、ああっ……!!」

ドクン、ドクン、ドクン!

子宮の奥で、なにかが脈を打ちはじめます。

熱く、深く、淫らで、悍ましい——

わたしの身体と心を狂わせる古の淫呪が、発動しているのです。

「だ。だめ……あ、あ、ああっ! い、今はダメです……耐えないといけないのにつ、ようやく訪れた好機なのにつ……こんな、淫呪でこれ以上おかしくされちゃったら……咲耶は、咲耶は……はああああんツ!

その無理……そうわかっている、抵抗するフリだけは見せていました。

けれどこの淫呪は、それさえも許してはくれません。

身も心も完全に快樂で塗りつぶし、最強の退魔師という仮面を破り捨て、最低のメスブ

夕の正体を頭に晒してしまおうのです。

「ふああああ、あ、ああああっ！ うああああ……あふああアアアア——！！」
月光の下、盛りの付いた犬畜生のように吠えたくるわたし。

体の一番奥から湧き上がる淫らな熱が、一瞬にして全身を焼き尽くし、心までもを淫らなケモノに変えていきます。

（あ、ああっため、だめえっ！ この淫呪っ……あ、あああっ！ すごいつ……やっぱり、す、すごすぎます……ううう……！！）

肉部屋丸呑み調教を数ヶ月も続けられ、完全に墮落してしまったわたしに施されたのは、口にするのもおぞましい古の呪刻印。

それは古来より生物の心身に大きな影響を与えてきた月の力と密接に関連した、あまりに凶悪で、そして淫らな呪術でした。

その強大きに反して、普段は何の効果もありません……夜天に紛れる月と同じく、あるいはサイクルに従う月経のように、その時になるまで密かに潜伏しているのです。

ですが、今日のような満月の夜——その一夜のみ、この古き呪いは蓄えられた秘跡を解放します。

子宮の中で刻み込まれた呪がのたうち回り、神経の一つ一つ、細胞の一片一片に至るまで、淫らな呪力を張り巡らせて——淫乱極まる、快樂の事しか考えられない肉塊へと変えてしまおうのです。

「ふああああ、あ、あああつ！　クはあああつ、ひ、ひああああ……んんっ！」

（うあああ、う、疼くっ……おっぱいも、子宮も、お尻もお口もおまんこもお！　全部、全部疼きすぎて……あああつ、この疼きっ……もう、何も考えられません……んんっ！）

あれほど忌避していた快楽を、狂うほどに望んでしまう。

さきほどイカされたばかりなのに、そんなことはもう忘れて、飢えて乾いて媚びきってしまふ。

もつと、もつと気持ちよくなり。もつともつともつとイキたい。もつともつともつともつと狂いたい、イキたいイキたいイキまくりたい――

「はあああ、あ、あふあああつ！　だ、だめええ……こんなこと考えてはいけないのに……はあああもつと、太くて逞しい触手っ、もつと、もつと……おとお……！！」

大きく髪を振り乱し、ぶるんぶるんと巨乳を揺すりたくって、わたしは、下品極まる腰使いで肉丸太へと擦り付けました。

「お、おほおおっ……クひあああああつ！

ぐちゅ、ずりっ、ぐちゅっずりっずりっずりっずりっずりっ！

前後左右に激しく腰を振りまくり、疼き猛る秘唇を、何度も何度も肉舌触手にコスリつけます。まるで自分の卑肉を削るような勢いで、へこへこ腰を振って触手摩擦に耽溺する――熱く燃えるような摩擦運動で、実際、溶けそうなほどの快感が秘唇から脳天にまで突き上がります。

「おおお！ ほおおお！ おほおおおおつ！ す、すごいいい……イイツ、気持ちいいッ！ 触手ゴシゴシするの気持ちいいのお……あはあああ、クひあああああ……」

わたしは、涙しました。

あまりの快楽に感激して、感動の涙を流してしまっていました。

（あはああつ、す、すご……すごいいい！ 淫呪のせいで、すっごく敏感になっちゃってます……さつきまでと全然違いますっ！ き、気持ちいい……気持ち良すぎて、もう、下品な腰振り止められませんっ！）

淫呪の魔力はわたしの肉体を淫らに高ぶらせるだけでなく、その感度をも加速度的に高めます。

もともと敏感だったわたしの肉体は、この数ヶ月もの魔界調教で開発しつくされ、指の一本、髪の一束ですら達するほどに改造されてしまっています……すでに開発しつくされた淫乱な肉体が、そこからさらに、何千倍もの感度に上昇させられてしまうのです。

ただでさえ開発しつくされ、自分でも抑えられないぐらい貪婪になってしまったわたしの肉体——常時でも完全に持て余し、うちに秘めた欲情に振り回されててしまっているというのに、その上で、これほどの飢えと疼きと感度を与えられてしまったら、もう——

「はあああつ、あつは、あつはああああンツ！ と、溶けるうううつ、おまんこ熱

すぎて……あん、あふ、あふああつ！　コ、コスるの気持ち良すぎて溶けちゃいます、擦り切れちゃいます……ふあああまたイクツ、咲耶っ、気持ち良すぎてまた負けちゃいます全然勝てないの快樂に負けっぱなしになっちゃうのおおおくくく!!」

屈辱的すぎる敗北宣言絶頂癖も、今となってはさらに興奮を高めるための濃密なスパイス。もうとつくにクセになってしまった被虐の悦びに全身を痙攣させながら、喉を仰け反らせて絶頂します。

イってる間にも淫らな腰振りにはさらに加速し、搾りたての愛液でドロドロに塗れた股布をぐじゅぐじゅと肉丸太に押し付けて、さらなる快感を貪ります

「はああ、はあ、はあ、クひああああ……んんっ！　す、すごいのお……でもまだ、まだなのおっ！　い、淫呪が疼いて疼いて……全然満足できませんっ、もつとください、もつと、もつと咲耶を犯して……お願いですううっ、咲耶をもつとイキ狂わせてくださいいいい……！」

いやいやと首を振りながら、涙を流して哀願。動きを抑えるために掴んでいた触手を、白手袋でシコシコとシゴきたてて誘惑し、おっぱいがだぶんだぶんと揺れるほどに激しく身体をくねらせて自ら凌辱をおねだりしちやいます。

もう、快樂を抑えるとか、ここから脱出するだとか、淫魔を倒すだとか、そんな事は微塵も考えていられません。

満月の夜、淫呪の力に支配されたわたしは、ただ、ただ――

(も、もつと……もつとほしいっ、もつと気持ちよくなりたいっ！ あはあああつ、もつと、もつと……おおおお……！)

わたしはただ、飽くなき快樂に飢え、乾き、そして狂った、ただ一匹の淫獣でした。

「ふああああ、あ、あ、あああつ！ おほおお……お、おおおおう……！」

満月の下、紫銀の長髪を振り乱し、舌を突き出し吠えたくる淫らな獣。

そんなわたしの声なき願いに、淫魔たちは、優しく応えてくれました。

「あはあああつ、あ、あ、あああつ！ ああ、ああああ……！」

ビクンツ、ビクンビクンビクンビクンツ！

渾身の奉仕に応えて、肉舌触手が激しく脈を打ち始めました。霊衣越しに秘唇に、さらにその奥の子宮にまで響くほどの逞しい雄の鼓動に、それだけでも安心してしまった、その

瞬間——

ドビュツ！ ドビュツドビュツドビュツドビュツドビュツビュウウウウウツ！！

「んほおおおおつ！ で、出てるうっ、熱いの、濃いの、すごいのおおおおつ！！」

大量にぶちまけられた、白濁精液の嵐、嵐、嵐。

挿入もしていなければ、直接性器を触れ合わせてさえもないのに、霊衣越しに射精された媚薬精液の淫激は、中出し種付けよりもずっと快美で、幸福で——

「イ、イクツ！ はあああああつ咲耶イキますっ、ドクドクドビュツドビュツ気持ち良すぎてイっちゃいますう……咲耶また負けちゃうっ、雑魚淫魔にも勝つなんて絶対無理っ、咲耶



っ、もうダメなの堕ちちやつてるの気持ちいいのにおおお〜〜〜!!」
弓なりに背筋を仰げ反らせ、喉を突き出してアへ狂う。

満月の輝きの下、わたしはこうして、最下級の淫魔にさえ自らの身の程を教えられ——
いえ。

「あはあああつ、は、はひっ、クひいいいいっ! も、もつとおお……あはあ、あひい
いっ! 疼くのっ、熱いのっ……だからもつと犯してえ、クソザコ退魔師の咲耶を、もつ
と、もつと負かして……狂わせてくださいいいい〜〜〜!!」

そんなたいそうなことなんて、もう、かんがえていません。

わたしは、ただ、ただ——

よるがあけ、おつきさまがかくれる、そのときまで。

「あはあああつ! イ、イクツ……咲耶またイクのおつ、イクイクイクイククううう
ううううううううう〜〜〜!!」

イクことしか、もう、かんがえることはありませんでした——